

解説 「国語教育」の方法と原理を問う

中山 智香子

本書は、職業として国語教師をつとめ、学校を問い続けた工藤信彦氏（一九三〇年）、樺太生まれ）の思考と実践の記録である。近年は『わが内なる樺太』外地であり内地であった「植民地」をめぐる『（石風社、二〇〇八年）をはじめ、樺太や日本の国境の研究を支える著者であるが、一九六〇年代末から詩論や詩の歴史、日本文学史等を著してきた。『現代国語速解法』（共著、有精堂、一九七六年）、『現代文研究法』（共著、有精堂、一九八八年）など国語教育に関わる共著、『書く力をつけよう』手紙・作文・小論文』（岩波ジュニア新書、一九八三年）などのハンディな単著もある。このジュニア新書は刊行以来、若い世代のみならず、大人が文章を書く際にも役立つてきたようだ。

著者は、一九五四年から札幌南高等学校、藤女子高等学校教諭を経て一九六五年に成城学園高等学校教諭となり、定年退職まで現代国語や古文を教えたが、一九年間あまり三省堂の教科

書編集に携わり、また一九八〇年代なかば過ぎにはフランス、アルザスの成城学園中等部、高等部の企画、実現に携わって赴任、成城大学文芸学部、法学部でも長く講義をもち、一九九〇年から定年退職時まで成城学園教育研究所長を兼任した。その傍ら、およそ四半世紀にわたって代々木ゼミナールで古文や現代文を担当、不登校生や帰国生らに向けたバイパススクールでも教え、FORUM7でも教えた人気講師でもあった。満州事変の前年に生を享け、日本の戦中から敗戦、占領、戦後へと至る激動の時期に学校教育を受けて、戦後復興、高度成長期からバブル期、その崩壊という日本の変転をまのあたりにしながら、国語教育、学校に関わってきたことになる。そうした日々の要請に向けて折々に書かれた文章群のなから、著者自身の眼で選び取り、構造的に編集したアンソロジーが本書である。十年ほど前から、国語教育に関わる諸論考や膨大なプリント類を整理していたそうだが、昨今の学校や入試をめぐる改革、また国語教育をめぐる変動の時期に、刊行のはこびとなった。

方法を問うまなざし

全体は三章から成り、約八割を占めるのは高校の「国語」に関わる部分である。「高校「国語」教師の仕事」と題された第一章は、専門誌の求めなどに応じて書かれた諸論考から成る。第二章は「国語」の授業から」と題され、こちらは高校の授業で生徒たちに配布されたプリント

などの文章群である。第一章と第二章はほぼ同じ分量をもつ。第三章は、分量的には全体の二割ほどであるが、高校の現場から大学や予備校、あるいは小学校へと学校の枠組を越境し、作文、文法、入試など国語にまつわるテーマを俯瞰的に論じ、文化としての国語を位置づける。本書の読者に国語を知らない人はいないだろうが、ここに繰り広げられる「国語」の世界は、必ずしも馴染みのない異質な、あるいはひよつとすると見たことも聞いたこともない斬新な世界かもしれない。多くの生徒や受講生たちを魅了してきた「工藤先生の国語」の特質とは何か。

まず何より人目を引くのは、書名の「職業としての」である。マックス・ウェーバーが一九一九年に行った講演の記録『職業としての学問』、『職業としての政治』のタイトルを想起させるこの言葉は、それで生計を得るという意味であり、高校の国語教師を生業とした著者のアンソロジーの書名として、決して唐突ではない。しかし主題は、教科名である国語にカギカッコを付したものである。カギカッコは、ウェーバーがただ二つのみ取り上げた学問、政治と国語との関わりを暗示する。国語は国文学、文学史などの学問領域に通じており、また近代日本の国民国家統合の歴史のなかで概念化されたという政治性を背負っているからである。それを学校という制度空間で教えることの意味を論じるのがテーマということになる。

しかしウェーバーの問題提起は、直接的にもさりながら、むしろ戦後から一九六〇年代、一九七〇年代にかけて、ウェーバーの問題提起を真摯に受け止めた日本の社会科学者、鶴見俊輔らの「思想の科学」を場とした論者たち、そしてとりわけ内田義彦を通じて、著者に継承され

た。内田が雑誌『看護技術』に書いた「方法を問うということ——看護人的状況としての現代における学問と人間」（一九七四年）は、特に重要である。

看護人的状況とはおそらく内田の造語であろうが、看護人は医学知識を携えた科学者である医師と患者のあいだに立ち、医師の専門知識による処置を実践し、伝達なども行う立場にある。しかし患者が科学の実験台というモノになってしまわないよう、ときには医師に疑問を呈し、批判も行うことが必要である。内田は、「人間の看護という具体的な仕事においては、医者だけが専門家なのは絶対、ないのだ」と強調し、今やいかなる職業であれ、看護人のように、科学と人間の相剋を克服しなければならぬとする。この相剋に対峙して方法を問うこと、つまり科学的な専門性をハウ・トゥの手続きと学問の原理的思考の双方に即して考え、これを人間の世界と照らし合わせていくことが、職業人として誰にでも必要であるというのが、内田の主張であった。そしてこれが、著者の「国語」教育論における方法的視点の原点となっている。

「国語」教育における科学と人間

したがって国語教育に関しても、科学的な専門性のハウ・トゥ的な方法手続きと学問的原理との方法的二極が問われることになる。ここで教科としての国語と科学との関係を考える必要が生じる。著者はたとえば古典文法に関して、生物学的分類にも通じる分類規則にしたがうと

して、独自の文法論を展開する。しかしより一般的には、そもそも国語が書物を通じて世界に対峙する点が重要である。自然科学のテキストであれ何であれ、文章で書かれている限り、すべて国語の範疇に含まれている。そこで著者は、一冊の書物を読むことに高校「国語」教育の課題を見出すのである。それは、高校の国語が個々の作品のパーツの読解を課題とするのに対し、大学では各専門分野の文献を、一冊のみならず何冊も読みこなせることが前提とされるというギャップをうめる営みである。

つまり国語の科学的ハウ・トゥとは、あらゆるジャンルの文章のパーツを整理、分類しつつ読み、一冊の本の章や節を構造的に読むことによって、世界を言葉で理解することとなる。ここに、国語が一教科であること、つまり学校という制度空間で教師と生徒によって行われる共同パフォーマンスであるという視点が接合される。したがって、各々が理解したことを書いて表現することが必須となるのである。試験をこのように位置づける視点はユニークであり、またこの学校論は、学校制度に向けた根本的な問題提起と読むことができる。

他方で国語の学問的原理の方法については、文献学や文学史研究、作家論などを学問的蓄積とし、その厚みが教育の担い手に恩恵を与えてきたとする。とりわけ本書では、『徒然草』をめぐる部分がわかりやすい。第一章の伊藤博之追悼の一文は、実はその導入である。著者は伊藤の『徒然草入門』（有斐閣新書、一九七八年）を授業テキストとし、また授業での説明に活用してきた。それは伊藤が国文学の研究者として、この小著を一般向けに、「現代を生きる私た

ちの直接的な心の糧として』『徒然草』を読むよう、書いたからであった。本書の『徒然草』の説明からは、著者が伊藤らの学問的研究の蓄積も取り入れつつ、高校生もまたこれを「心の糧として」読むよう促し、研究の閉じた専門性を開いていく様子が、生き生きと伝わってくる。なお第二章には恋や愛の作品が多く扱われ、学校で聞いたらどきまぎするような解説が付されている。これも教育実践の軌跡だが、また同時に「国語」への人間的な要請、つまり文学など文章によってひとが魅了される決定的な契機を喚起するという要請に、こたえるものでもある。文学に疎い人でも、何か国語の教科書で読んだ（読まされた）一文に、深く感動したり驚いたりした経験があるだろう。著者は、教師もまた一人の良き読者でなければ、つまり作品をおもしろく読めなければ「職業人としては失格」と述べる。おもしろさやそれをとらえる感覚を言葉で語り、また書き、教えることができなければ「国語」教育にならないのである。ここでの颯爽とした文体はライブ感にあふれ、著者の教室での声、エネルギーを彷彿とさせる。

一人の市民として日常を生きる

こうして本書は、書物の方法や構造にきわめて意識的な著者による一冊の書物である。最後の一文には、ひととき強いメッセージを込めていると読まざるを得ない。ここで読み手は、あらためて「国語」に潜む政治性へと思いを促されるのである。一九四五年八月一九日、十四歳

で樺太を離れ、「国家は国民を守らないのだ」（『わが内なる樺太』より）と意識した著者は本書においても、「祖国が私を故郷から追放した」と思い続けたこと、「私の中で、〈日本〉という〈国家〉は、すでになく、いまだない」こと、「平和は幻想である」ことを、ほとぼしるような筆致で書くのである。

日本の戦後にはもちろん、政治体制や学校体制を問う社会運動、学生運動の時期があった。著者自身、そして教師として対峙し論じ合った生徒や学生らの考えには、学校制度そのものに背を向ける方向性もあつただろう。しかし著者は、導きの糸とした「思想の科学」がそうであったように、踏みとどまって方法的、論理的に問い、立場の違いを超えて共に在ることを日常性の課題としたのである。「職業としての」は、カネ稼ぎではない。一人の市民として生きる際の、公共性への問いかけである。投げかけられた課題はとても重いが、ここから拓かれる希望がある。渡されたバトンを落とすわけにはいかない。著者の半世紀あまりの「国語」教育実践に、心より深く感謝を捧げたい。

了